

バイヨンの犬

石井辰彦

Pierres fanées murs sans écho

Je vous évite d'un sourire

— Paul Eluard, *Critique de la poésie*

水色に烟る朝から酔臥する過客、を、叩き起せ！ 瘦犬

垂乳根の母犬の乳房に群れて……畜類の（何といふ）健気さ

今日もまた、大魚を、煮込む。……鹽のみで……鹹い（世界の）片隅で

魚屋が捌く魚の身の尾花色……内乱は終結したか？

漁撈に出でて還らず。諍乱の有脚湖から、寡婦も鰥夫も

樹冠火の気配……拂曉、沐浴の姉は（幽かに）身を震はせる

姫入の間近な姉と棲むといふ弟の（真つ黒な）愛犬

聳音を潜ませて木の下道を行きつ戻りつするのは、誰だ？

生臭き（馭人の）右手……翠陰に、握れば、あはれ、緑したゝる

サンダルに、翼？ 蘇生す廢墟へと導く（若き）案内人の、踵

翠玉の雨降る森を抜けるのは、物思ふ畜類には、難しい

身を反らす木と木、の、間…… 大なる魔獣の背に揺られて、過る

日を詛ふ者が激發す、と、道へる、レビヤタン…… その、影を、打ち見き

*

何だらう？ 徐かにうねる（海ならぬ）森…… の、奥処、に、顕現れた、の、は

視よ！ 緑みなぎる森の酷熱に（微笑しながら）凍れる塔を

門前に出迎の犬。その黒き瘦躯を撫でむ、行人として

靈魂は、有頂天へと、飛び上がる。……だつて、微笑が、こんなにも、碧い

月光に沐浴する、塔—— 真つ昼間、目を閉ぢて、其を、心に描く

眠る前…… 否、死ぬる前…… この森の廢墟を思ひ出すはずだ。屹度

王城の故址に（拙き）半生を（やつとこさ）顧みる。劇しく

*

この国に老人は（ほとんど）ゐない。若い身空で、皆、殺された

漆黒のリボンで髑髏を飾る。昔、姉貴が、してゐた、やうに

翻す（薄鈍の）袍…… 直近の記憶も（既に）模糊としてゐて

剃髪を（密かに）庶幾ふ姉がゐる。……蒲柳で美男な案内人には

若者は孤児の子。だから——身を窶すばかりの戀をするのが怖い

双魚宮生れで、根生……………肉身は（緑の）水に充たされてゐて

透明な犬のまなざし——あゝ、なんと！末若き案内人も持てりけり

踏み外す道の教訓は……………人骨を踏むか、地雷が炸裂するか

姉は黠された。兄貴は殺された。……………観光地点の（すぐ）裏で

——生なんて博奕に過ぎぬ。さう言はう……………犬を飼ふ（魚座の）若者に

*

犬の子を二匹貰つて（一匹を）死なせた。内戦の果てた夜に

亡びうせよ（孰れ何奴も悪を為す）男子胎にやどれりと言し夜

——狼の乳で育つた王もゐた、と、告げむ。子犬と共寝の冠者に

王妃には蛇神の娘…… さなくんば（犬が守護する）多産の処女を

この国を領く不死の肉體を求めて死んだ王。その微笑

病衰の肉を洩れ来る光ゆゑに、乳海となる—— 王のテラスは

呼び戻すべき、か？ 病に朽ちた身を、引き摺つて、行く（あの）乞食を

密林と化しゆく（壮麗な）世界—— 言葉は要らぬ。微笑があれば

(乾季には) 光が沃ふ。降り頻る(雨季には) 雨が沃ふテラスを

死の床に譚妄れゐても、王は王—— 食指に迦樓羅の指環

——精神は死んだ！ と、王は宣る。めくるめく青空の守護せる塔に

*

みどり豊饒けき(この) 王土 …………… 諍乱は鎮まり、雷も(ほぼ) 除去された

小隊は(ひたすら) 前進む…………… 密林の向かうは(もつと蒙い) 森だが

樹冠火の気配？ それとも、戟塵の予兆？ 森を目覚めさせたのは

石を割き生立ちし樹の幹に手を、当つ。戦友を待つ風をして

乞丐の童女に与ふ。……………後生善処のために、蓮荷の花束を

沼がある。死者の（無数の）亡魂が、濁った水に溶け込んでゐる

親親の肉を拵つた（かも知れぬ）犬の子孫を飼ふ。弟として

涕泣もせざりき……………雨の降る夜に。惨禍が村に及んだ秋に

微笑して瞥てゐただけか？ 塵殺も、燻り燃ゆる（無人の）都邑も

緑したゝる、森……………そこで民族が（突然）朽ちた。一再ならず

殺された《誰か》が、言った——Verde que te quiero verde. と。風の彼方で

手應緑！……………其を盥ふ水香しき（緘黙の）家

腰斬の詩人？ それとも墨刑のカイン？ 戦禍を睹ず、死んだのは

靈魂は（また）見出した…… 日に摩滅し崩壊れゆく（あの）塔を

檣槓を噛み締めながら…… I climb to the tower-top … 夢見るために

… and lean upon broken stone. 悲哀に似た青空を見上げるために

涸れ始めてはるぬか？ 微笑の塔を蓋ひゐる青空、の、光は

応答は、ない！ ただ、石は、微笑する…… 永遠の摩滅に耐へながら

聴て来る（人類の）夜にも—— 塔は（関かに）聳えゐることだらう

*

挨拶をしよう！ 烟^{けふ}れる過去からの微笑^{びせう}に。塔に棲^{すま}む瘦犬^{やせいぬ}に

【註】エビグラフに用いた詩「詩の批評」は、第二次世界大戦時のレジスタンス詩集『ドイツ人の逢引きの地で』(Au rendez-vous allemand)に収められている。「色褪せた石たち 応えない壁たち／ほくは きみらを微笑から遠ざける」(安東次男訳)。10ページのスペイン語の引用は、『ジプシー歌集』(Primer romancero gitano)所収のフェデリコ・ガルシア・ロルカ「夢遊病者のロマンセ」(Romance sonámbulo)から。「緑よ わたしはお前を愛する 緑よ。」(小海永二訳)。原形を残した漢詩の引用は、高啓の五言古詩「水上盪手」から。入谷仙介の訓読に従う。11ページの英語の引用は、詩集『塔』(The Tower)所収のW・B・イエイツ「内戦時代の省察」(Meditations in Time of Civil War)の第Ⅳ部「私は憎しみや心の充足や来るべき空虚の幻影を見る」(I see Phantoms of Hatred and of the Heart's Fullness and of the Coming Emptiness)から。